大阪府埋蔵文化財調査報告 2000－6

七ノ坪遺跡

2001年3月

大阪府教育委員会

はしがき

七ノ坪遺跡は、大阪府の南部、大阪湾に面した泉大津市の東南、和泉市に接する地域に位置しています。周辺には、国史跡の池上曽根遺跡をはじめ、池浦遺跡・豊中遺跡・伯太遺跡・府中遺跡、さらに東側後方の信太山丘陵上には高地性集落の惣ノ池遺跡、丸笠山古墳など弥生時代～古墳時代の遺跡が多く立地していて、地域的なまとまりをもっているといえます。戦後、水田の地下げ作業で土器が大量に出土したことから遺跡として知られるようになりました。１９６８年に府立泉大津高校の校舎改築に伴って発掘調査が行なわれて以来、学校の内外で調査が数多く実施されてきました。そして、学校敷地の北部中央から東部にかけて古墳時代前期の住居・墓・溝などが、また西部では水田畦畔・水路などが発見され、集落と水田が一体としてとらえられることがわかってきました。今回の調査は学校内の西端にあたる地点で、下水道管の埋設工事に先立って実施しました。調査範囲が小さく、狭かったのですが、古墳時代の水田畦畔が見つかり、以前から想定されていた水田が大規模に広がることが追証できたといえます。さらに下層にも水田はあるのかどうか、追求するために、土壌の分析を行いました。これには池上遺跡との関わりで、水田があるのかどうか、その存否を本地点で検証できないかという面もありました。分析の詳細は本書をご覧いただくとして、このような手法も含めて、今後も地道にデータを蓄積するなかで弥生時代から古墳時代の水田像がより鮮明に見えてくるものと思われます。

調査に際しましては、地元の方々ならびに関係各位に多くのご協力をいただき、深く感謝いたします。引き続き、皆様のご理解とご協力をお願いします。

平成13年３月

大阪府教育委員会
文化財保護課長　小林　栄

例　　言

1．本書は、府立泉大津高校の下水道放流切替え工事に先立って実施した泉大津市北豊中町１丁目１－１所在七ノ坪遺跡の発掘調査報告書である。
2．調査は、大阪府教育委員会施設課の依頼を受け、大阪府教育委員会文化財保護課主任技師亀島重則を担当者として実施した。
3．現地調査は、平成１２年度事業として、平成１２年６月に行った。なお、出土資料の整理作業は、現地作業と並行して始め、平成１３年３月まで行った。
4．今回の調査地の土壌に含まれる花粉等の分析は、川崎地質株式会社に委託した。
5．本書の執筆・編集は、亀島が行った。
6．発掘調査・遺物整理及び本書作成に要した経費は、全額大阪府教育委員会が負担した。

目　　次

はしがき・例言
第１章　調査に至る経過 …… 1
第２章　調査の成果
　第１節　調査の方法 …… 2
　第２節　遺跡の土層構成 …… 3
　第３節　遺構 …… 4
　第４節　遺物 …… 8
第３章　七ノ坪遺跡発掘調査に係る花粉、
　　プラント・オパール分析
　　川崎地質株式会社 ……11
第４章　まとめ ……15
抄録

第1章　調査に至る経過

遺跡は、泉大津市の西部、北豊中町1丁目～2丁目に所在する（第1図）。南北300m、東西300mを遺跡範囲とし、弥生時代から古墳時代の集落跡、墳墓跡、水田跡と考えられている。1960年、泉大津高校北門前の水田で地下げ作業が行われ、その際多くの土器が出土した。これが遺跡発見の端緒となり、小字名の「七の坪」に因んで七ノ坪遺跡とされた（関連文献、森61）。その後も土木工事などにより、土器が出土していたが、発掘調査が行われるまでには至らなかった。1968年、泉大津高校内での試掘調査を契機に、高校内で幾度かの発掘が行われてきた（既住調査一覧表）。その結果、古墳時代前期の住居や墳墓が見つかり、遺跡の重要性が認識されることになった。その後、高校に隣接する北東部の地域にも調査が行われてきた。1990年代に入ってからはより広範囲に調査が進展してきた。しかし、高校内での調査と違い、民間の工事に先立つ調査のため、調査面積が限られ、以前から検出されている古墳時代の住居や墳墓、水田などがどのように関わり、集落構成をして時期的に変化していったが、不明のままであった。今回の調査はこのような問題に答えるには調査規模の面からいっても難しいが、従前から検出されている遺構群に新たな検討を加える素地を得るべく、現地に臨んだ。

今回の調査は大阪府教育委員会施設課が計画した「大阪府立泉大津高校内の下水道放流切替え工事」に先立って実施した発掘調査である。本工事のうち、地表下約3mに達する体育館の北側

第1図　泉北低地の遺跡（1/50,000）●印が調査地

から東側に沿った下水管埋設工事を調査対象とした。このうち、東側については、現況の管路に並走する位置にあること、またすでに実施した体育館部分の調査の範囲に当たるとみられることから、対象外とする。調査は幅２ｍ、延長４０ｍの範囲とすることが決定した。調査は、２００0年６月１２日から６月２９日まで行なった。調査後の７月４日、下水管埋設工事の作業中に立会し、土層の断面観察を行い、各層の略測と土壌サンプルを採取した。

第２章　調査の成果

第１節　調査の方法（第２・３図）

調査地が体育館の北側に当たり、作業スペースに乏しい区域のため、西端から約３～５ｍごとに、盛土以下を機械掘削をしてから人力掘削による調査を行い、予想される水田面などを検出した後、調査区を東に後退させながら進めた。遺構などの記録にあたって、既設のマンホール蓋に中心点を決め、任意座標を組み、工事用図面内に位置の対応をつけた。調査区の西端から５ｍづづ小区割りを行なう（Ａ～Ｉ区）。遺構の実測は平板測量で行なった。高さの基準として、校門内脇に設置された大阪府水準点（№434　ＴＰ10.99ｍ）から水準測量して調査区近くに仮ベンチマークをおいて利用した。この手法により調査を進め、遺構面を３面検出した。第３層下面で中世の小穴・溝を、第4層下面で水田畦畔を検出した。全体に水田面が広がることが判明したが、先の事情により再び全面の掘削をするのは不可能なため、畦畔の検出された５箇所について、１

第２図　調査位置図（1/5,000）

～1．5mの大きさで深掘坑を設け、下層での遺構の有無を確認した。その結果、新たに2箇所で水田畦畔を検出した。この結果、今回の調査で3面の遺構面を検出したことになる。

第2節　遺跡の土層構成

七の坪遺跡周辺は槙尾川の右岸に形成された扇状地の段丘化が進んだ地形(低位段丘）に立地している。そのため全体に西北方向の海岸に向かって緩く傾斜しており、土層堆積もそれに倣って傾斜するのを基本とする。観察できた土層から基本層序を抽出し、各土層ごとにその特徴を記し、定義づけておこう。

盛土層――もともと水田のあったところに学校建設のために、盛土造成したもので、約80cmの層厚を測る。表層約10cmはコンクリートで覆う。

第1層……黄灰色（2.5Y6/1）粘質微砂質土　旧耕土　層厚10～15cm。全体に削平されており、西端のA・B区とG区の一部に残る。（第3図1）

第2層――灰色（5Y6/1）微砂質土　鉄斑・マンガン斑を多く含む下部層との2層に分かれる。層厚20～25cm。層下面高は東端でTP10.5m弱、西端で約10.2mを測る。瓦器細片を含む。（3～3''）

第3層――灰白色（10Y8/1）粘質微砂質土　鉄斑・マンガン斑を含み、明黄褐色～黄橙色（10YR7.5/6）を帯びる。層厚10～20cm。須恵器・土師器・瓦器の細片を含む。（4）

第3'層――灰白色(5Y8/1)砂質粘土～砂質粘質土、灰白色（5Y～2.5Y7/1)微砂質粘土～微砂質粘質土（にぶい黄橙色(10YR7/4）～浅黄色(2.5Y7/4)を帯びる）調査区の東部のみ存在する。下位層の第4層上面にできた窪地に堆積した土層。第3層としてとらえたが、第4層の流水堆積の最終段階とみることもできる。あるいは、独立して別の層にすべきかも知れない。層厚はG～I区で約15から30cm。(7～10)

第4層――灰黄色(2.5Y7/2)砂～砂質土、灰白色（2.5GY8/1～2.5Y6/2）砂・微砂・粘質砂砂粒差によるラミナがみられる。流水による堆積層。層厚15～40cm。(11～15)

第5a層……灰白色～灰色(N7/0～6/0)～灰白色～褐灰色（10YR7/1～6/1）粘土～微砂質粘土　上部水田面を覆う土層。層厚2～7cm。A区西端では15cm。(16～20)

第5b層――灰色(N5/0)～灰白色(5Y7.5/1)粘土　上部水田のベース土。微細粒（1～2㎜）スミを微量含む。調査区東端の土層上面で9.9m、西端では9.7mを測る。層厚10cm弱～15cm。(21～23・32)

第6層――灰色（N5/0～6/0）粘土　微砂質粘土のところもある。6箇所の深掘坑で確認した。A区では上部が明青灰色～青灰色を呈する。C区ではスミ微細粒を微量含む。下部水田のベース土。層厚20～30cm。(24～31)

第7層――緑灰色（7.5GY6/1他）～明緑灰色（10GY8/1）粘土　層厚約40cm。(33～35')

第8層――黒褐色～褐灰色(7.5YR3.5/1)粘土～黒褐色(7.5YR3/1)砂質粘土調査後の立会時にE区で確認した。層厚25cm以上。(36・36')

第3節　遺構(第3・4図)

第4層上面で小穴・溝、第5層上面・第6層上面で水田畦畔を検出した。

小穴11

A区中央で検出。径19cm、深さ15cmを測り、埋土はにぶい黄橙色粘土混じりの灰白色粘質微砂質土。

溝12

A区北壁中央で確認された小溝。平面で検出できなかったため、幅・方向ともに不明。壁面での検出のため、小穴の可能性もある。

水田畦畔

第5層上面で8条、第6層上面で2条検出した。

第5層上面検出畦畔

アゼ1

A区東寄りで検出した。上端幅25ｃｍ、下端幅115cm、高さ4cmを測り、北東、南西のそれぞれに延びる。アゼの東側法面は、2段になって西より40cm広くなっている。アゼの東側山面高はTP9.81m。

アゼ2

アゼ1の西側にほぼ直角に取り付く。上端幅25cm、下端幅50cm、高さ4cmを測る。長さ約3mで調査区外に出るため、その先の走向は不明だが、西側にはアゼ3が取り付く。アゼ2の東側田面高9.76～9.79m、西側9.71～9.72m。

アゼ3

アゼ2の西北端にほぼ直角にとりつくアゼ。上端幅20から40以上cm、下端幅40から60以上cm、高さ5cmを測る。アゼ3の西側田面高9.75～9.74m。

アゼ4

C区で検出された。上端幅32～36cm、下端幅62cm、高さ4～6cmを測る。北東～南西に走る。東側の山面高9.82～9.8m、西側9.75～9.77m。

アゼ5

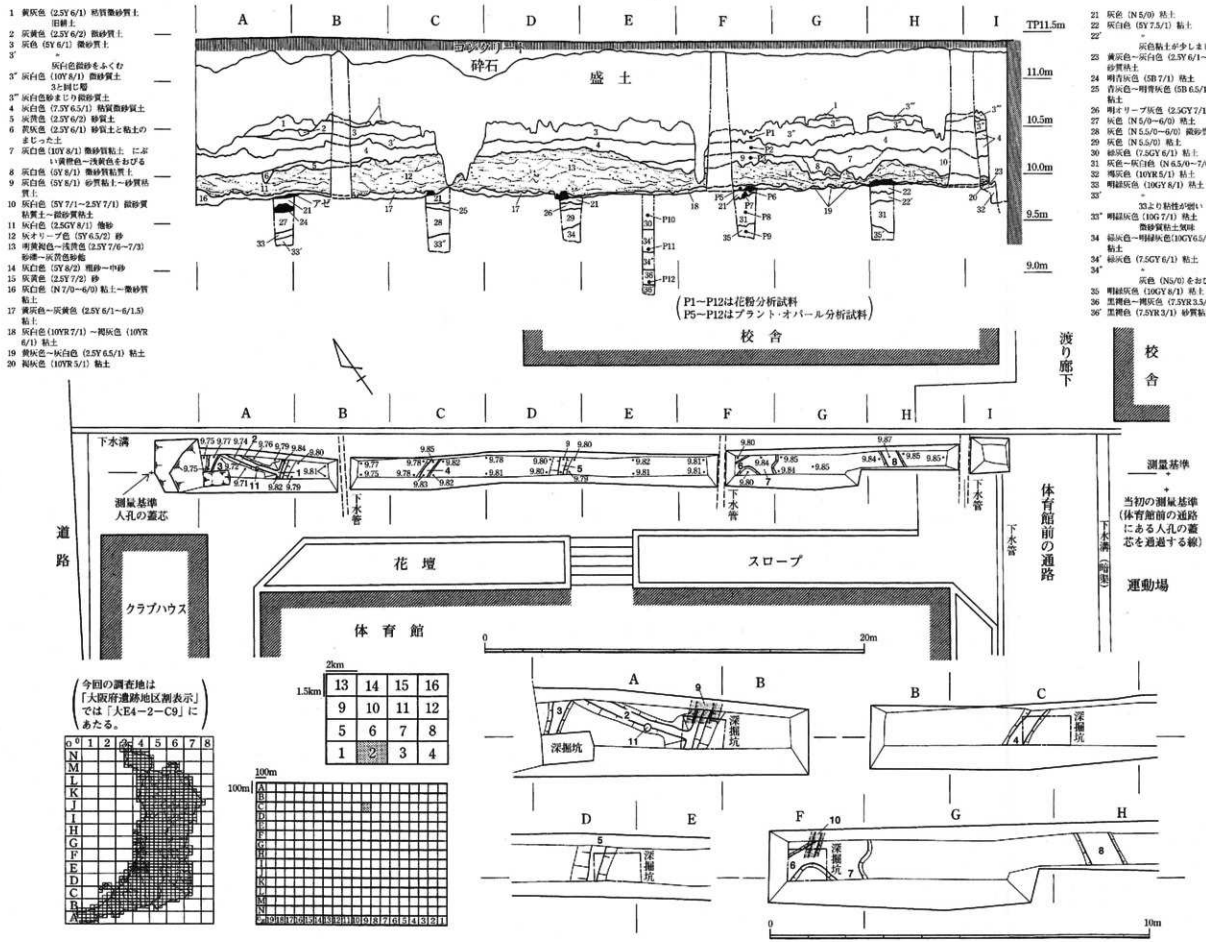
D区で検出された。上端幅32cm、下端幅94cm、高さ6cmを測る。北東～南西に走る。東側の田面高9.82m、西側9.76m。

アゼ6

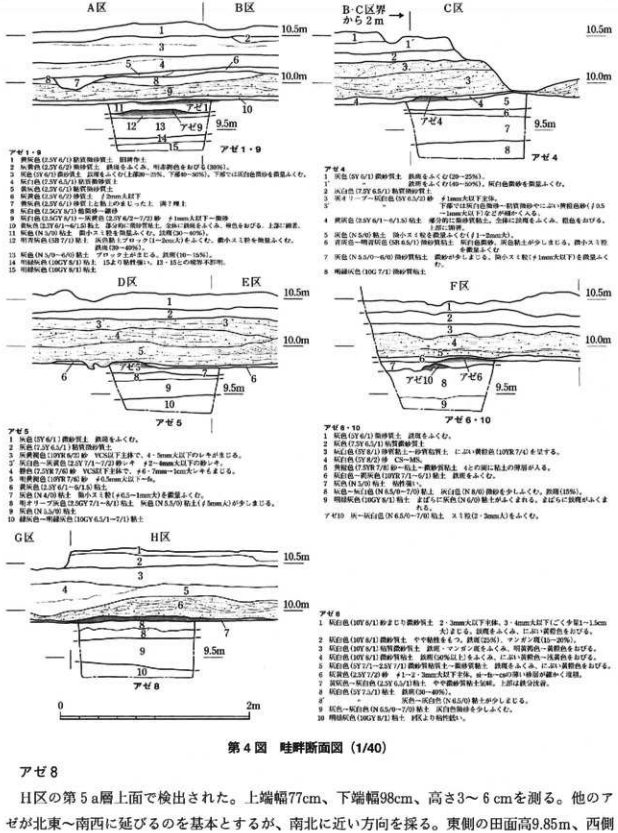
F区で検出された。上端幅38cm、下端幅55cm、高さ4cmを測る。南西から延びる畦畔は直交してぶつかるアゼ7とともに北壁中に入るため確証できないが、北東に伸びると見られる。西側の田面高9.81m。

アゼ7

F区で検出された。上端幅68cm、下端幅85cm、高さ2～4cmを測る。アゼ6に南から延びてほぼ直角にあたる。結合部の一部が調査区北壁中に入るので、確証できないが、西側のアゼ法面の線がアゼ6を越えて続かない点を見ると、T字状にアゼが接合するものと考えられる。東側法面は交点直前で弧を描いて膨らむ。東側の田面高9.85m、西側9.80m。



第３図　遺構図（1/200・1/100・1/40）



第4図　畦畔断面図（1/40）

アゼ8

H区の第5a層上面で検出された。上端幅77cm、下端幅98cm、高さ3～6cmを測る。他のアゼが北東～南西に延びるのを基本とするが、南北に近い方向を採る。東側の田面高9.85m、西側9.84～9.85m。

第6層上面畦畔

第5層上面の水田面を調査後、あらためて調査区内全面を発掘することができず、既出の畦畔部分を中心に人力で掘削し、水田遺構の検出に努めた。

アゼ9

A区で検出された。上端幅37cm、下端幅68cm、高さ3～5cmを測る。北東～南東方向に走る。東側の田面高9.68m、西側9.68m。

アゼ10

F区で検出された。上端幅15cm、下端幅36cm、高さ4～6cmを測る。畦盛土中に北東～南東方向に走る。東側の田面高9.81m、西側9.74m。

2面の水田面のうち、上位面では、狭長な調査区のため、畦畔で限られた水田の1筆の全容を検出することはできなかった。今回調査区外へ延びる畦畔から9枚の水田を検出したことになる。水口など畦畔に付随する施設は検出できなかった。下位面では、調査区がさらに限定されたため、2条の畦畔の確認から水田面の存在を確認したに留まる。調査区東端の田面高9.81m、西端で9.68mで地形的には緩やかに西へ下降する地に造成している。地形的な位置から言うとアゼ1・5などは上畦畔たりうる。また、畦畔の幅から区分してみると、大畦畔・中畦畔・小畦畔と分かれる。大畦畔に当たるのはアゼ1・5（7・9？）、中畦畔はアゼ3・4・6、小畦畔はアゼ10になる。

第4節　遺物

須恵器・土師器・瓦器などの破片が少量出土した。出土した層位は第2層から第4層まで及ぶが、第2層から第3層が中心となる。また、出土地点で見るとA区からC区の第3層が多く、D区から東のH区では第2層に遺物が含まれる。ここでは、第3層出土遺物から図化できたものを報告する。第3層からは、古墳時代の須恵器から中世鎌倉時代の羽釜まで含み、後出する遺物を含まない。このことから第3層は中世の包含層と考えられる。

須恵器（1～5）

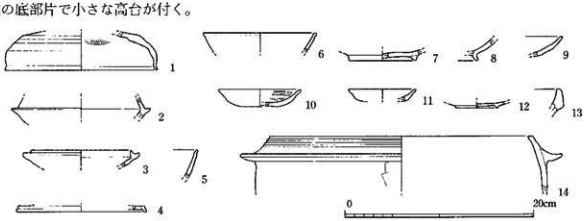
古墳時代から飛鳥時代の杯蓋（1）、杯身（2・3）、平安時代の蓋（4）、身（5）がある。

瓦器（6～11）

椀には口縁部片（6）、断面三角形の高台部片（7）、端部が四角い断面をもつもの（8）がある。皿（9・10）のうち、10の内面にはヘラミガキが残る。

土師器（12）

椀の底部片で小さな高台が付く。



第5図　出土遺物（1/4）

七ノ坪遺跡検出遺構

番号	地区	種別	形状・規模（大きさ、深さ）	遺構面・時期・埋土・アゼの方向
11	A 区	小穴	径19cm、深さ15cm	第4層上面、中世、灰白色（2.5Y7/1）粘質微砂質土、鉄塊含む、にぶい黄橙色（10YR6/3）粘土まじり
12	A 区	溝	幅不明、深さ15cm	第4層上面、中世、黄灰色（2.5Y6/1）砂質土と粘土の混じった土、鉄塊含む。
1	A 区	アゼ1	上端幅25cm、下端幅75+40cm、高さ4cm	第5b層上面　N67°～69.5°
2	A 区	アゼ2	上端幅25cm、下端幅50cm、高さ4cm	第5b層上面　N20°～16° W
3	A 区	アゼ3	上端幅20～40cm以上、下端幅40～60cm以上、高さ5cm	第5b層上面
4	C 区	アゼ4	上端幅36cm、下端幅60cm、高さ4～6cm(北壁側) 上端幅32cm、下端幅60cm(中央部) 上端幅35cm、下端幅62cm、高さ5cm(南壁側)	第5b層上面
5	D 区	アゼ5	上端幅32cm、下端幅94cm、高さ6cm	第5b層上面
6	F 区	アゼ6	上端幅38cm、下端幅55cm、高さ4cm	第5b層上面　E30° S
7	F 区	アゼ7	上端幅68cm、下端幅85cm、高さ2～4cm	第5b層上面
8	H 区	アゼ8	上端幅77cm、下端幅98cm、高さ3～6cm	第5a層上面　N9.5° E
9	A 区	アゼ9	上端幅37cm、下端幅68cm、高さ3～5cm	第6層上面　N61° E
10	F 区	アゼ10	上端幅15cm、下端幅36cm、高さ4～6cm	第6層上面　N50° E

七ノ坪遺跡出土遺物一覧

	地区名	遺構・層位	種類	器種	量 cm		( )は復元値		色調	胎土	焼成	残存率	備考
					口径	器高	底高	高台径	その他	内面・外面・断面				
1	G・H 区	第3層（一部第2層を含む）	須恵器	杯蓋	16.0	(残存高) 4.10			(内) N7/灰白 (外) N6/灰 (断) 7.5Y7/1灰白	密（微小の黒白砂粒まれに φ6mm大のチャート φ3mm大の長石が含まれる）	良	(口縁) 6％	反転復元 内面に同心円文
2	A区	第3層上部	須恵器	杯身		(残存高) 2.30			(受部径) 14.6	(内) N7/灰白 (外) N6/灰 (断) N7/灰白	密（φ1mm以下の長石黒色砂粒が含まれる）	良	(受部) 6％	反転復元
3	F区	第3層上部	須恵器	杯身	10.5	(残存高) 1.80				(内) N7/灰白 (外) N7/灰白 (断) N7/灰白	密（微小の黒、白色砂粒が含まれる）	良	(口縁) 10％	反転復元
4	B～C 区	第3層	須恵器	蓋	15.0	(残存高) 6.50				(内) N7/灰白 (外) N7/灰白 (断) N7/灰白	密（φ1mm以下の長石黒色砂粒が含まれる）	良	(端部) 8％強	反転復元
5	A区	第3層下部	須恵器	杯身	—	(残存高) 3.10				(内) N6/灰白 (外) N6/灰白 (断) N6/灰白	密（微小の白、黒色砂粒が含まれる）	良		断面のみ 高台付？
6		第3層	瓦質	椀	9.85	(残存高) 2.05				(内) N4/灰 (外) N3/暗灰他 (外) 2.5Y5/4黄褐 (断) 2.5Y8/1灰白	密（φ1mm以下の白、黒色砂粒が含まれる）	やや粗	(端部) 11％	反転復元
7	A区	第3層下部	瓦質	椀		(残存高) 1.20	(高台径) 7.00			(内) 5Y6/1灰 (外) 5Y7/2灰白 (断) 5Y7/1灰白	密（φ2mm以下の白、黒砂粒が含まれる）	やや粗	14％	反転復元
8	A区	第3層上部	瓦器	椀	—	(残存高) 2.35				(内) N4/灰 (外) N4/灰 (断) N7/灰白	密（微小の白、黒色砂粒が含まれる）	良		断面のみ
9	A区	第3層上部	瓦器	椀						(内) N3/暗灰 (外) N3/暗灰 (断) N7/灰白	密（φ1mm以下の白、黒、橙色砂粒が含まれる）	良		断面のみ
10	A区	第3層下部	瓦器	小皿	8.7	(残存高) 1.80				(内) N5/灰 (外) N4/灰 (断) N7/灰白	密（微小の白、黒色砂粒が含まれる）	良	17％	反転復元
11	A区	第3層下部	瓦器	小皿	7.1	(残存高) 1.30				(内) N3/暗灰 (外) N3/暗灰 (断) N7/灰白	密（φ1mm以下の白黒色砂粒が含まれる）	良	12.50％	反転復元
12	B～C 区	第3層	土師器	椀		(残存高) 0.70	(高台径) 4.40			(内) 7.5YR7/6暗灰 (外) N3/暗灰 (断) N6/灰	密（微小の白、黒色砂粒が含まれる）	良	(高台部) 20％	反転復元 貼付高台
13	B～C 区	第3層	須恵器	こね鉢						(内) N6/灰 (外) N2/黒 (断) N7/灰白	密（微小の白、黒色砂粒が含まれる）	良		断面のみ
14	A区	第3層上面～上部層	瓦質	羽釜		(残存高) 6.05			28.3	(内) N4/灰 (外) 2.5Y4/1黄灰 (断) 2.5Y7/1灰白	密（φ1mm以下の白、灰、黒色砂粒が含まれる）	良	(口縁) 7％	反転復元 一部スライド復元 摩滅が著しい

七ノ坪遺跡既往調査一覧表

番号	調査場所	調査期間	遺構	遺物	面積(㎡)	調査原因	主体	文献	備考*
1	北豊中町1-1-1	1968.6	遺構検出	弥生（Ⅰ新・?Ⅲ・Ⅴ）庄内・布留、石器			石部正志		試掘
2	北豊中町1-1-1	1968.7	土坑墓・河道・中世溝	上に同じ須恵器はⅡ・Ⅲ、布留、須恵器(6c)	378.17	泉大津高校校舎改築	府教委		府教委1次
3	北豊中町1-1-1	1971.6	遺構検出	弥生（前・中・後）			石部正志		試掘
4	北豊中町1-1-1	1971.11	炉・河道	弥生（Ⅳ～Ⅴ）、古墳（布留）	256	泉大津高校校舎改築	府教委		府教委2次
5	北豊中町1-1-1	1972.10～12	古墳期一竪穴住居6、方形周溝墓1	古墳（土師器・須恵器、杯、甕）	18×9 2箇所	泉大津高校食堂等改築	府教委		府教委3次
			木棺直葬墓1、溝1						
6	北豊中町1-1-1	1972.12～73.3	遺構検出	弥生(中・後)、サヌカイト剥片、古墳（土師器・須恵器 、4～7世紀)	トレンチ5箇所		地歴部	地歴部74	試掘
				中世（瓦器・羽釜・土錘）	47.25				
7	北豊中町1-1-1	1973.3～4	溝3	弥生（前・中・後、土師器・石器・木製品）	400	食堂兼同窓会館建設	府教委		府教委4次
8	北豊中町1-1-1	1973.8～10	溝2、河道3	庄内・砥石	710	住宅建設	府教委		府教委5次
9		1973.11～12	遺構未検出	遺物未検出	5.1	区画整理	調査会	調査会73	試掘坑No.27
10	豊中604・2他2筆	1974.9～10	溝・小穴・土坑、河？	弥生？土師器	585(390+195)	住宅建設	市教委	市教委75	
11	豊中477・1	1974.9～10	小穴・溝	土師器・須恵器・瓦器		住宅建設	市教委	市教委75	
12	豊中444・1	1974.9～10	弥生期一溝・小穴(Ⅳ・Ⅴ)、溝(Ⅴ)1	弥生(Ⅳ・Ⅴ)	75坪	宅地造成	市教委	市教委75・76	
			古墳期一溝（布留～6世紀）	布留～、須恵器(6世紀後半)、木片、植物の種					
13	豊中580・2	1995.6～96.3	遺構未検出	弥生(中期)、須恵器	14.5	住宅建設	市教委	市教委76	
14	豊中586・587・588・1	1995.6～96.3	遺構未検出	土師器	48	住宅建設	市教委	市教委76	
15	北豊中町606・1・609	1981.～82.	古墳前期一溝1、小穴2	古墳期（布留）	167	埋め立て工事	市教委	市教委82	市教委81 第1地点
16	北豊中町1丁目2・15	1981.～82.	古墳前期一溝?、掘立柱建物(中世?)		830	保育所建設	市教委	市教委82	市教委81 第2地点
17	北豊中町618・1	1981.～82.	中世・溝3		240	埋め立て工事	市教委	市教委82	市教委81 第3地点
18	北豊中町1-1-1	1981.8～82.3	古墳期一竪穴住居・溝、弥生?古墳前期一水田		1250	泉大津高校体育館他建設	府教委	府教委82	
			古墳前期・水田、中世・小溝群・素掘井戸						
			掘立柱建物（7～11世紀）						
19	北豊中町1-1-1	1983.6～8				泉大津高校校舎増築他	府教委	府教委84	
20	北豊中町1-1-1		弥生期一溝、弥生～古墳期一水田	弥生	780	泉大津高校プール建設	府教委		
21	北豊中町2丁目464-6,-8,-10,-13	1986	遺構未検出	土師器片	35.1	事務所兼住宅建設	市教委	市教委87	市教委8603
22	北豊中町2丁目464-7	1987.4	遺構未検出	土師器片	30.59	住宅建設	市教委	市教委88	市教委8703
23	北豊中町2丁目517・1,518・1	1989	自然流路（谷？）	遺物未検出	23.5	倉庫建設	市教委	市教委90	市教委8905
24	北豊中町1丁目547	1989	遺構未検出	遺物未検出	27.9	共同住宅建設	市教委	市教委90	市教委9004
25	北豊中町1丁目495-1,496-1	1989.12～90.1	河川状遺構・ピット	土師器（コンテナ7箱）	154	共同住宅建設	市教委	市教委89	市教委H1-8
26	北豊中町2丁目503-1,504	90.2	自然流路	弥生？～古式土師器	21.25	駐車場造成	市教委	市教委91	市教委9005
27	北豊中町2丁目504,502・10一部	1992	遺構未検出	土師器片	6.8	事務所付き貸し倉庫建設	市教委	市教委93	市教委9206
28	北豊中町1丁目612・4	1992	遺構未検出	土師器片	4.6	店舗付き住宅建設	市教委	市教委93	市教委9223
29	北豊中町2丁目476・3、・4	1993.9	遺構未検出	瓦	15.5	倉庫建設	市教委	市教委94	市教委9309
30	北豊中町1丁目536～539,534・1,535・1の一部	1993.1	遺構未検出	土師器(摩耗細片)	7.9	共同住宅建設	市教委	市教委94	市教委9313
31	北豊中町2丁目513・30一部	1994.12	遺構未検出	土師器片	7.38	倉庫付き事務所	市教委	市教委95	市教委9417
32	北豊中町1丁目540・1, 541	1995.8	小穴?	遺物未検出	5.17	共同住宅建設	市教委	市教委96	市教委9508
33	北豊中町2丁目455-6	1996.6	遺構未検出	土師器片	2	土地開発	市教委	市教委97	市教委9611
34	北豊中町1丁目613-1,614-1,615-1	96.8	遺構未検出	遺物未検出	3	宅地造成	市教委	市教委97	市教委9614
35	北豊中町2丁目500-1、510・1	1997.11	遺構未検出	遺物未検出		倉庫建設	市教委	市教委98	市教委9709
36	北豊中町1-1-1	2000.6	古墳前期一畦畔（水田、3面）、中世一小穴1	土師器・須恵器・瓦器・黒色土器	50	下水管敷設	府教委	本報告	府教委00010

* 各調査機関固有の調査略号。
遺物の項で、弥生式土器は、「弥生」と省略した。
遺構の項で、遺構名の後ろの数字はその数量を示す。

七の坪遺跡　関連文献

著者名	発行年	書名（論文名）	書名（雑誌名、号数）
泉大津高校地歴部	1974.3	「七ノ坪遺跡試掘調査報告」	『和泉考古学』6号
大阪府教育委員会	1969.3	「七ノ坪遺跡発掘調査概報」	
大阪府教育委員会	1974.3	「七ノ坪遺跡発掘調査概要」	
大阪府教育委員会	1982.2	「七ノ坪遺跡現地説明会資料」	
大阪府教育委員会	1984.3	「七ノ坪遺跡発掘調査概要」Ⅲ	
大阪府教育委員会	1978.3	「池上・曽根遺跡発掘調査概要」Ⅹ	
大阪府教育委員会	1980.3	「池上・曽根遺跡発掘調査概要」ⅩⅡ	
大阪府教育委員会	1985.3	「池上・曽根遺跡発掘調査概要」ⅩⅦ	
泉大津市教育委員会	1975.3	「七ノ坪遺跡発掘調査概要」	
泉大津市教育委員会	1976.3	「豊中遺跡発掘調査概要」	
泉大津市教育委員会	1982.3	「七ノ坪遺跡発掘調査概要」Ⅱ	
泉大津市教育委員会	1987.3	「七ノ坪遺跡」	『泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報』5
泉大津市教育委員会	1988.3	「七ノ坪遺跡」	『泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報』6
泉大津市教育委員会	1989.3	「七ノ坪遺跡」	『泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報』7
泉大津市教育委員会	1990.3	「七ノ坪遺跡」	『泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報』8
泉大津市教育委員会	1991.3	「七ノ坪遺跡」	『泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報』9
泉大津市教育委員会	1993.3	「七ノ坪遺跡」	『泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報』11
泉大津市教育委員会	1994.3	「七ノ坪遺跡」	『泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報』12
泉大津市教育委員会	1995.3	「七ノ坪遺跡」	『泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報』13
泉大津市教育委員会	1996.3	「七ノ坪遺跡」	『泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報』14
泉大津市教育委員会	1997.3	「七ノ坪遺跡」	『泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報』15
泉大津市教育委員会	1998.3	「七ノ坪遺跡」	『泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報』16
豊中・古池遺跡調査会	1973.12	『豊中・古池遺跡発掘調査概報』その1	
泉大津市史編さん委員会	1983.1	『泉大津市史』第2巻　史料編　Ⅰ	
泉大津市史編さん委員会	1995.2	『泉大津市史』第5巻　別編・史料編補遺	
泉州の自然と文化財を守る連絡会議	1985	「七ノ坪遺跡」	『茅渟波』2
井藤徹	1974	「七ノ坪遺跡」	『日本考古学年報』25（1972年版）
中井貞夫	1975	「泉大津市七ノ坪遺跡出土の土師質甑」	『大阪文化誌』4
森浩一	1961	「泉大津高校北門前出土の土師器」	『和泉考古学』5号
石神怡	1977.3	「池上弥生ムラの変遷」	『考古学研究』23-4
石神怡	1994	「池上曽根遺跡の立地と変遷」	『吉野ヶ里遺跡と古代国家』
石部正志	1977	「原始・古代集落の変遷ー泉北平野」	『地方史マニュアル』9（地方史と考古学）
石部正志	1979.9	「水稲農耕文化の展開」	『岸和田市史』第1巻　自然・考古編
和泉市いずみの国歴史館	1999.1	『和泉の弥生物語』ー発掘・池上曽根遺跡とその周辺ー	
豊中古池調査会	1980	『大園遺跡助松地区第二次発掘調査報告書』	
日下雅義	1980.11	「槇尾川右岸の埋没地形と居住環境の変化」	『歴史時代の地形環境』
日下雅義	1991.5	『古代景観の復原』	

須恵質土器（13）

こね鉢の口縁端部片である。

瓦質土器（14）

口縁端部下に3条の凹線を巡らし、その下に鍔を付けた羽釜形土器である。鉄釜を模倣した形態。

第3章　七ノ坪遺跡発掘調査に係る花粉、プラント・オパール分析

川崎地質株式会社

はじめに

七ノ坪遺跡は、大阪府南部の泉大津市北豊中町1丁目1－1に立地する。

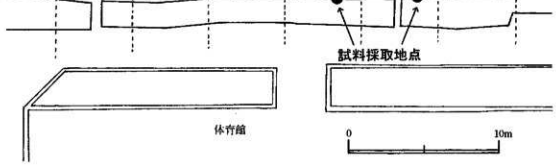
当分析調査では、古墳時代前期を中心とした時期の遺跡周辺の古植生等の古環境変遷ならびに、前後の堆積物を対象とした堆積時期の推定および古植生等の古環境変遷の推定を行うために、発掘調査に伴って露出した各地点より採取した試料を対象として花粉分析およびプラント・オパール分析を行った。

試料について

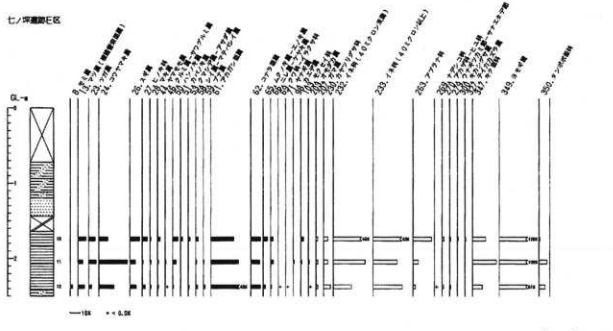
第6図に示す2地点で、大阪府教育委員会の担当者により試料が採取された。試料採取地点の模式柱状図を第7図のダイアグラムに示した。柱状図凡例は図に示し、各種分析の試料採取層準はそれぞれのダイアグラムに示すとおりである。

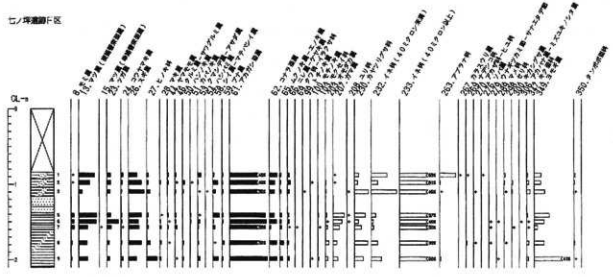
分析方法・結果

分析方法、検鏡方法、分析結果の記載（ダイアグラムの表記方法）など、当社既報を参照されたい。花粉分析処理は渡辺（1995）に、プラント・オパール分析処理は藤原（1976）のグラスビーズ法にしたがっている。

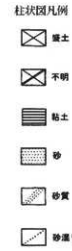


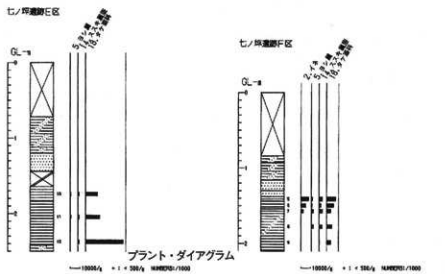
第6図　試料採取地点（1/250）





花粉ダイアグラム





プラント・ダイアグラム

第７図　花粉、プラント・オパールダイアグラム

花粉分帯

木本花粉組成では、アカガシ亜属が卓越し、スギ属、マツ属（複維管束亜属）を伴うという全試料共通した特徴が認められたことから、分析した全試料を一括して、Ⅰ帯とした。また、草本花粉の特徴などから、さらにａ～ｄ亜帯に細分が可能であったことから、以下に各花粉亜帯の特徴を示す。本文中では花粉組成の変遷を明らかにするために、下位から上位に向けて記載し、試料№も下位から上位に向かって記した。

(1) Ⅰ帯d亜帯（E区試料№12～10、F区試料№9）

木本花粉の割合が低く、草本花粉、胞子の割合が高い。草本分では、イネ科（40ミクロン以上）、ヨモギ属が高率を示す。また、低率であるがガマ属が連続して出現する。

(2) Ⅰ帯c亜帯（F区試料№8～5）

木本花粉の割合が高く、胞子の割合が低くなる。草本花粉では、イネ科（40ミクロン以上）のみが高率を示す。また前亜帯より引き続き、低率ではあるがガマ属が連続して出現する。

(3) Ⅰ帯b亜帯（F区試料№3、2）

引き続き木本花粉の割合が高く、胞子の割合が低い。草本花粉では、イネ科（40ミクロン以上）のみが高率を示す。また、ガマ属は出現しなくなる。

(4) Ⅰ帯a亜帯（F区試料№1）

引き続き木本花粉の割合が高く、胞子の割合が低い。草本花粉では、イネ科（40ミクロン以上）のみが高率を示す。アブラナ科、ソバ属が特徴的に出現する。

既知の資料との比較（堆積時期の推定）

今回調査を行った七ノ坪遺跡に隣接して、弥生時代の環濠集落跡とし有名な池上曽根遺跡がある。同遺跡内では、渡辺ほか（1990）による弥生時代中期頃から古墳時代中期頃の花粉分析ほかの報告がある。大阪府南部地域では、主に泉北丘陵で同様の分析が行われ公表されてているが、大阪湾沿岸地域での分析結果の公表例はほとんどない。

池上曽根遺跡の分析結果では、弥生時代中期前半（P01-2,3帯：図5-1参照）にはニレ属－ケヤキ属、エノキ属－ムクノキ属などの河畔林要素の花粉が多産する傾向にあった。ニレ属－ケヤキ属、エノキ属－ムクノキ属などは局地的な植生を反映していると考えられ、これらを除外するとマツ属（複維管束亜属）、スギ属などの針葉樹種と、アカガシ亜属が高率を示すようになる。その後、弥生時代中期後半（P01-4帯）にはマツ属（複維管束亜属）、スギ属などの針葉樹種が卓越するが、古墳時代前期（P15-1～3帯）では弥生時代中期前半同様にマツ属（複維管束亜属）、スギ属などの針葉樹種と、アカガシ亜属が高率を示す。

今回分析を行った最下位層準であるE区試料№12から、最上位層準のF区試料№1まで池上遺跡同様に、マツ属（複維管束亜属）、スギ属などの針葉樹種と、アカガシ亜属が高率を示す。

一方今回の分析層準のうち堆積時期の明らかな層準は、試料№7、6間上面がそれぞれ古墳時代

前期の遺構面であると考えられているのみである。また担当者の談によれば、「試料No.2層準が6～7世紀、試料No.1層準が中世に堆積した可能性があるが、根拠に乏しい。」ということである。

このような状況から、試料No.7より下位の層準が古墳時代前期以前の堆積であり、試料No.6より上位の層準が古墳時代前期以降の堆積であるという、現状の推定時期以上の精度で推定することはできなかった。

大阪府内でも分析結果の豊富な古河内湾沿岸地域、あるいは泉北丘陵の分析結果を概観した場合、中世後半にはマツ属（複維管束亜属）が卓越するようになる。一方、F区試料No.1層準ではマツ属（複維管束亜属）はさほど高率でないことから、この層準が中世後半以降に堆積した可能性はほとんど無いと考えられる。ただし、アブラナ科花粉がやや高率を示すなど、中世後半以降の特徴もかいま見られる。長期に渡り耕作土として使用されていた可能性も残る。

古環境変遷

ここでは、花粉分析結果およびプラント・オパール分析結果より遺跡近辺に限った古環境を推定する。

(1) d亜帯期(E区試料No.12～10、F区試料No.9)

胞子およびヨモギ属などキク科の草本花粉が高率で出現し、タケ亜科やススキ属のプラント・オパールが多産することから、遺跡内には草地（荒れ地）が広がっていた可能性がある。一方でガマ属が安定して出現するなど試料採取地点は低湿地であったことが分かる。

一方イネ科（40ミクロン以上）花粉も高率を示し、試料採取地点近辺で稲作が行われていた可能性も指摘できる。しかし、プラント・オパール分析では「イネ」は検出されておらず、判断ができない。また、上位層準から「根」、「乾痕」などを伝わり花粉が混入した可能性もある。

(2) c亜帯期（F区試料No.8～5）

d亜帯期から一転して、胞子およびヨモギ属などキク科の草本花粉が低率になる。また、d亜帯期同様にイネ科（40ミクロン以上）が高率を示す。d亜帯期に比べ、イネ科（40ミクロン未満）や、カヤツリグサ科などの湿生植物にゆらいする花粉が低率であること、試料No.7より上位で「イネ」のプラント・オパールが検出できることから、この時期には遺跡内外に水田が広がっていたと考えられる。一方、ガマ属が安定して出現することから、水田ではない湿地（沼沢地）が周辺に残っていた可能性も高い。

(3) b亜帯期（F区試料No.3、2）

c亜帯期に比べ草本花粉の種数が減り、ガマ属も検出されなくなる。一方、イネ科（40ミクロン以上）は高率を示している。これらの試料ではプラント・オパール分析を実施していないものの、これらの層準が水田耕作土であり、遺跡内外に水田が広がっていたと考えられる。

(4) a亜帯期（F区試料No.1）

栽培種であるソバ属花粉が検出され、栽培種の可能性のあるアブラナ科花粉もやや高率になる

ことから、中世前半から後半あるいは近世にかけての耕作土であった可能性も指摘される。

遺跡内外には水田が広がり、裏作でのナタネ栽培、畦や休耕田、あるいはイネとの二毛作としてソバを栽培していた可能性がある。

まとめ

七ノ坪遺跡E区、F区における花粉分析およびプラント・オパール分析の結果、以下のことが明らかになった。

(1) 花粉分析により、古墳時代前期を中心とした時期の地域花粉帯をⅠ帯とし、さらにd～a亜帯に細分した。

(2) 花粉分析結果、プラント・オパール分析結果を基に、調査地近辺での古環境変遷を推定した。

特筆すべき点は以下の事柄である。

① 花粉分析結果から、d亜帯期（古墳時代前期以前）にも稲作が行われていた可能性が指摘できる。しかし、「イネ」のプラント・オパールが検出できなかったことから可能性は低く、上位からの生物擾乱による混入の可能性もある。

② c亜帯期には水田のほか、沼沢湿地も存在したと考えられる。

③ a亜帯期には、水田裏作や二毛作も行われていた可能性がある。

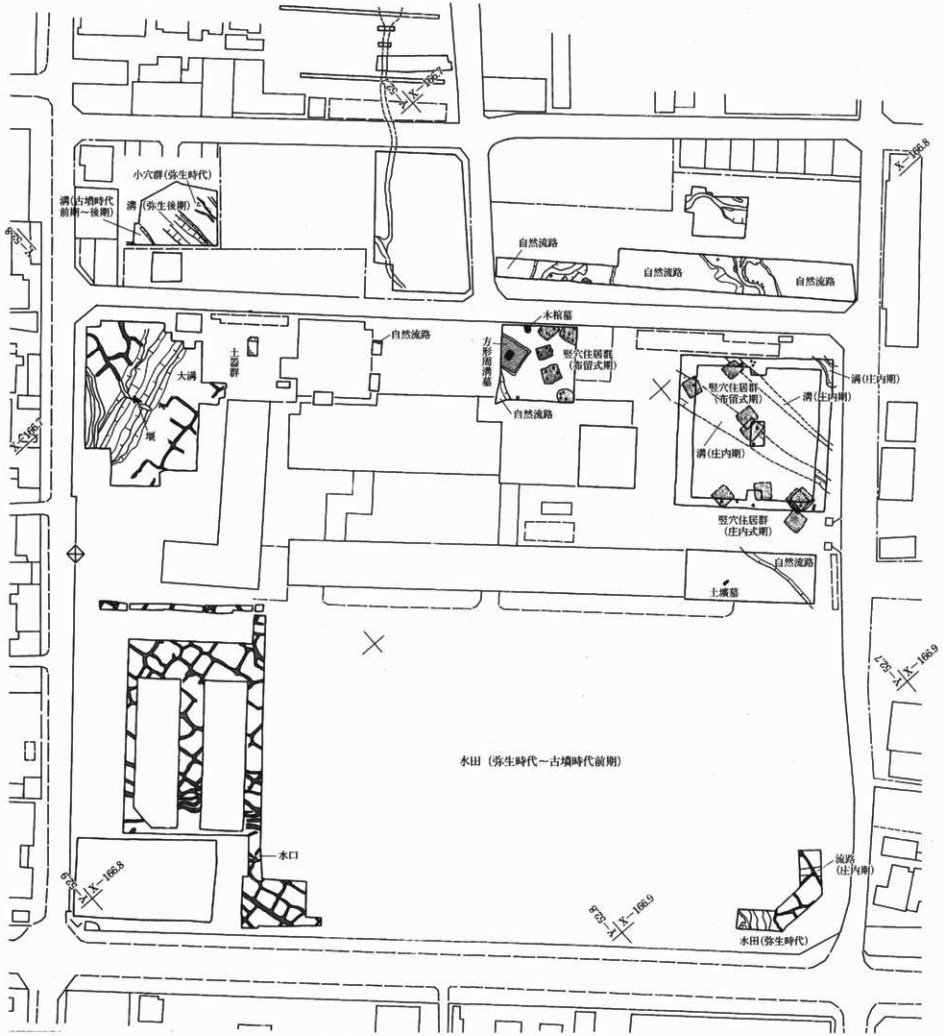
引用文献

渡辺正巳・古谷正和（1990）「花粉・珪藻・火山灰分析」『史跡池上曽根遺跡発掘調査概要－松ノ浜曽根線建設に伴う発掘調査－』大阪府教育委員会.

第4章 まとめ

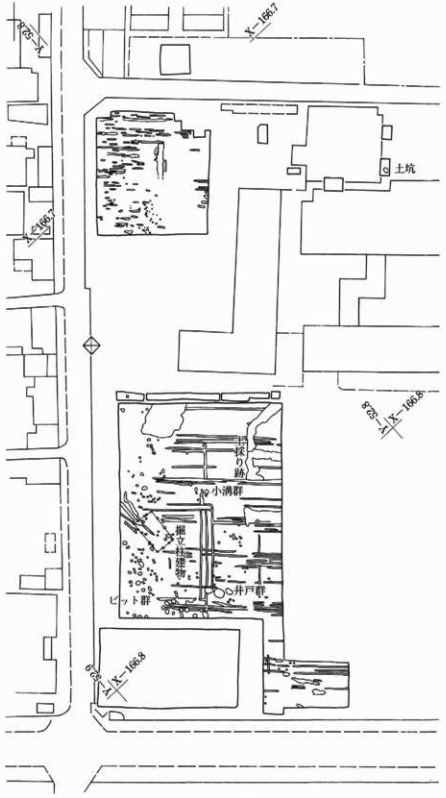
すでに南に隣接する体育館、さらに北側の校舎増築での調査でも水田が検出されている。これら既掘調査区での成果も踏まえてまとめておこう（第8図）。まず、水田面の対比を行い、各面での水田の広がりを検討するところから始めよう。第5層b上面の遺構は前回の体育館建設地の下層アゼに対応すると考えられる。上層アゼは、その上約10cm前後にあって、明瞭に検出できるところと不明なところがあったとの所見がある。H区の第5層a上面で検出されたアゼ8が対応する可能性がある。つぎにアゼの時期である。前回では遺物はごく少量であり、今回では皆無の状況から時期の確定は難しい。先の調査では、上層アゼを古墳時代前期とみて、下層アゼは、弥生後期から古墳時代前期頃のものと想定している。ベース土は粘土で、かなりの層厚をもつ。校内南隅では、水田面から約1.8mで砂礫層に到達している。ここの調査では、一部掘り下げたものの、部分的な確認にとどまり、水田の有無、堆積時期について推定するデータは得られなかった。

また、北側の校舎増築建設地では水田面の時期については上層で把握した遺構面の年代から古墳時代前期末葉の遺構面より古いところから、古墳時代前期初頭～中葉と推定している。今回の調査では、水田に伴う遺物がなく、時期の決め手に欠く。先の調査所見に倣って、古墳時代前期（庄内～布留式期）とみておく。七ノ坪遺跡の立地するところは、段丘低位面にあって、東から西へ海岸部にゆるく傾斜する地形にあって、小規模な微高地が西に張り出した位置にある。学校敷地の北東部が微高地から南西に傾斜する地域になっている。この一帯に住居群や方形周溝墓をはじめとする墓群が発見されている。それに接するように水田が広がっているのである。学校敷地内から西方にさらに延びるものとみられる。水田は、南西に存在する埋没開析谷までの間に存在する浅い谷状低地あるいは泥湿地を利用したものと推定される。水田は2時期あるいは3時期を経て、砂層で埋没する。約20～30cm程の堆積あるが、土器はほとんど出ない。さきにふれたように時期はわからないが、堆積砂層自身が単一の堆積というより、色調・土性に違いがあることから、一度の堆積というよりは、幾時期かの回数を経て堆積し、相応の層序を形成したと考えられる。その上位の層は、中世包含層であり、アゼの推定する古墳時代からかなりの年数であることから、当然過去に削平された土層も勘案すべきであるが、水田埋没の直接的契機となる洪水砂が、水田経営を放棄させる方向へ導いたと考えられる。放棄した理由が治水技術の限界によるものかどうか、そしてその事態によって他の新たな可耕地を獲得する方向に向かっていったのか、多方面からの追求が必要である。現時点での考古学的な所見からすれば、中世まで水田の存在が認められないことから水田耕作の不適地となったとはいえる。最後に北に位置する池上・曽根遺跡、東は豊中、府中遺跡あたりまで視野に入れて、古墳時代前期頃の水路と考えられる大溝を追いながら、水田などの耕作地と集落の実態をとらえる手がかりとしたいと思う。ここでは、既掘資料を整理しながら、古墳時代前期の水路網と水田・居住地（ムラ）復元図を作成した（第9図）。七の坪で検出された水田は庄内期(弥生時代後期？）から布留式期にかけてのもので、発見地点から推測すると、約2haは確実に有すると考えられる。高校敷地の南半分が該当する。さらに南への広がり、また西への広がりを推定される水路の存在からすると、7～10haまで広がる可能性がある。しかし、南西付近には埋没開析谷である凹地が延びていることから、これらの水田には常に洪水による川面の冠水に見まわれる危険が付きまとっていたようである。実際、水田は布留期の田面を厚い砂層が多い、その後中世まで耕地としての痕跡を残していない。さきにふれたように、この布留期の冠水が自然災害としてもそれを復旧せずに放棄したところのものは何だったのか。推定する可耕面積からすると、かなりの人打撃を受けたはずである。この生産基盤の喪失は地域社会、地域集団間の支配権の激化する時期の中で大きな意味をもつ。七の坪の方形周溝墓の埋葬者に代表される地域首長の首長権の弱体化を招いた可能性があるのではないか。あるいは、弱体化した状況下で、その指導力を発揮できず、水田の廃棄となって表れたのかもしれない。当該期の泉北地域での歴史的動向を明らかにしていく上でも、耕地とムラの実態を追求していく意義は深いと考える。

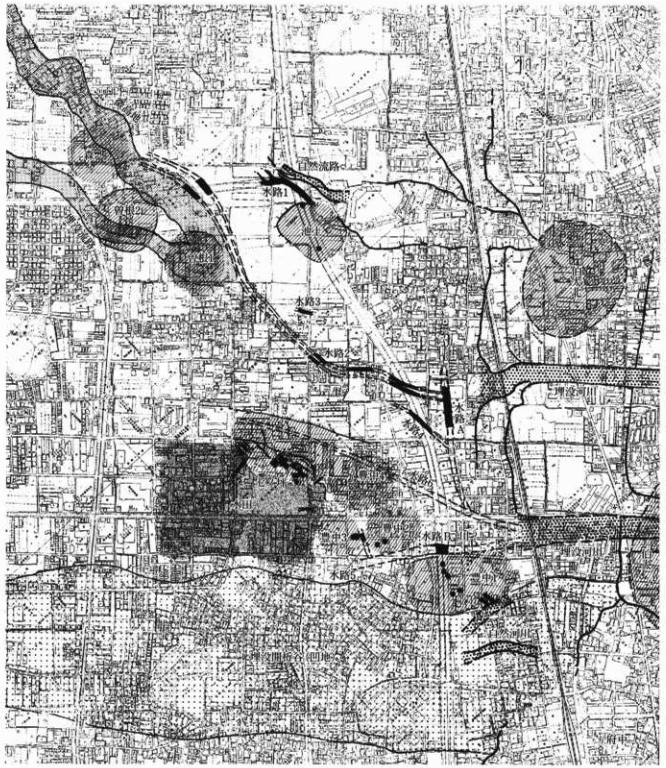


第８図　遺構配置図（1/1,000）

▲ 弥生時代～古墳時代前期



▲ 中　世



第９図　古墳時代前期水路想定図（1/10,000）

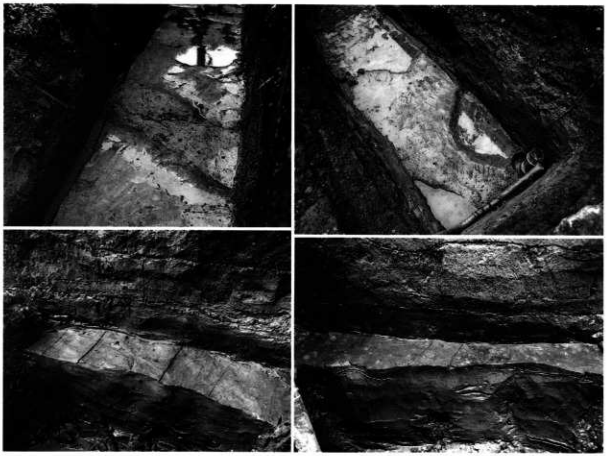
報告書抄録

ふりがな	しちのつぼ
書名	七ノ坪遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	2000－6
編著者名	亀島　重則、渡辺　正巳
編集機関	大阪府教育委員会　文化財保護課
所在地	〒540-8571　大阪府大阪市中央区大手前2丁目　TEL06-6941-0351
発行年月日	2001年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
七ノ坪 (しちのつぼ)	泉大津市 (いずみおおつし) 北豊中町 (きたとよなかちょう) 1丁目1-1	27206	9	34° 29′ 43″	135° 25′ 28″	平成12年6月	76	府立泉大津高校内下水道放流切替え工事

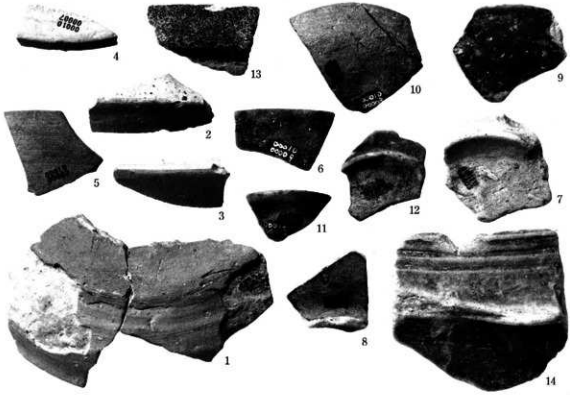
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
七ノ坪遺跡	集落 水田 墓	弥生時代 ～ 古墳時代	水田畦畔(3面)	土師器・須恵器・瓦器他	古墳時代前期水田の検出

水田畦畔（古墳時代前期）



アゼ4（C区、南東から）｜アゼ6・7（F区、北から）
アゼ9（A区、南西から）｜アゼ10（F区、南西から）

出土遺物（土師器・須恵器・瓦器）



大阪府埋蔵文化財調査報告 2000－6

七ノ坪遺跡

発行　大阪府教育委員会
〒540-8571
大阪市中央区大手前2丁目
TEL. 06-6941-0351
発行日　2001年3月31日
印刷　サツキ印刷株式会社